

## 武蔵野日曜集会

## 栄光は何処に

——ヨハネ伝第9章1～34節——

1995年1月22日

小池辰雄

天災地災 神の業の顕れん為 キリストの栄光の体現者となる 現行者 神さまから遣わされ  
 たる者 他覚者 栄光は何処に

【ヨハネ9:1～34】

1 イエス途往くとき、生まれながらの盲人を見給いたれば、2 弟子たち問いて言う『ラビ、この人の盲人にて生まれしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』3 イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。4 我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能わず。5 われ世における間は世の光なり』6 かく言いて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言給う、7 『ゆきてシロアム（称けば遣されたる者）の池にて洗え』乃ちゆきて洗いたれば、見ゆることを得て帰れり。8 ここに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言う『この人は坐して物乞いいたるにあらずや』9 或人は『夫なり』といい、或人は『否、ただ似たるなり』という。かの者『われは夫なり』と言いたれば、10 人々いう『さらば汝の目は如何にして開きたるか』11 答う『イエスという人、泥をつくり我が目に塗りて言う「シロアムに往きて洗え」と、乃ち往きて洗いたれば、物見ることが得たり』12 彼ら『その人は何処に居るか』と言えば『知らず』と答う。

13 人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。14 イエスの泥をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なりき。15 パリサイ人らも亦いかにして物見ることが得しかと問いたれば、彼いう『かの人わが目に泥をぬり、我これを洗って見ゆることを得たり』16 パリサイ人の中なる或人は『かの人安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』と言ひ、或人は『罪ある人いかで斯る徴をなし得んや』と言ひて互に相争いたり。17 爰にまた盲目なりし人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいうか』彼いう『預言者なり』18 ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるようになりしことを未だ信ぜずして、目の開きたる人の両親を呼び、19 問いて言う『これは盲



目にて生まれしと言う汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』<sup>20</sup> 両親こたえて言う『かれの我が子なることと盲目にて生まれたる事とを知る。<sup>21</sup> されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問え、年長けたれば自ら己がことを語らん』<sup>22</sup> 両親のかく言いは、ユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議りて『若しイエスをキリストと言ひ顕す者あらば、除名すべし』と定めたるに因る。<sup>23</sup> 両親の『かれ年長けたれば彼に問え』と云えるは、此の故なり。<sup>24</sup> かれら盲目なりし人を再び呼びて言う『神に栄光を帰せよ、我等はかの人の罪人たるを知る』<sup>25</sup> 答う『かれ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』<sup>26</sup> 彼ら言う『かれは汝に何をなししか、如何にして目をあけしか』<sup>27</sup> 答う『われ既に汝らに告げたれど聴かざりき。何ぞまた聴かんとするか、汝らもその弟子とならんことを望むか』<sup>28</sup> かれら罵りて言う『なんじは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり。』<sup>29</sup> モーセに神の語り給ひしことを知れど、此の人の何処よりかを知らず』<sup>30</sup> 答えて言う『その何処よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。』<sup>31</sup> 神は罪人に聴き給わねど、敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを我らは知る。<sup>32</sup> 世の太初より、盲目にて生まれし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。<sup>33</sup> かの人もし神より出でずば、何事をも為し得ざらん』<sup>34</sup> かれら答えて『なんじ全く罪のうちに生まれながら、我らを教うるか』と云いて、遂に彼を追ひ出せり。

### ●天災地災

兵庫県南部の、神戸中心の地震災害は——天災という言葉があるが、天災という言葉は私あまり当たらないと思う——地の災い、地災なんだ。そういう言葉はないけれども。今度のは正に地震からきていますから。地震から大火災が起きて、五千人以上の人が死んだり行方不明になったりした。本当に大変なことでした。そういうことを思いながら、今歌った讚美歌(522番「道に行きくれし」)を選びました。やはり、そういう時に、神を信じている方々はその苦難の中でも御名を讃えるという、心の中で黙って讚美歌を歌うということがあるでしょうが——ヨーロッパの人ならば、欧米の人ならば、そういう時に讚美歌が口に出ると思うけれども——日本では、そういった人は極めて少ない。だから、我々はこの福音を受けとって讚美歌が歌えるというのは大変なことなんです。そういうことで、一人二人三人と、この福音の道にあなた方お一人一人が一对一の伝道をしてください。全く信仰の非常に少ない国ですから。

「ああ、キリスト教か」



なんて言っただけで、聞いただけでそっちのけにするようなのが多いから。そういうことではないんだ。

「キリスト教」という言い方が私は嫌いだ。教えではない。キリストは自分で歩いたんだ。道なんだ。キリスト道です。「宗教」という言い方も嫌いだ。教えではなくて、これはみんな道で、具体的で、自分の足で歩く事態が本当の宗教なんだ。そういう意味で、我々はキリスト道の真理のためにどこまでも戦っていかなくてはいいかん。なにも教会の悪口を言うわけではないが、いわゆる教会宗教ではダメなんだ。

私が最初にキリスト道の本を読んだのは、内村鑑三の『宗教と現世』という本です。この本を読んで、私は驚いて感激した。内村先生は、何ととっても、自分で戦って道を開いた人ですから。いろいろな苦難に遇ったときに、内村先生のもう一つの本は、『キリスト信徒の慰め』という本がある。いろいろな苦難のときにいかに聖書が慰めであるか、力であるかと。

「事業に失敗せし時、不治の病にかかりし時、人に棄てられし時、貧に迫りし時」と、いろいろなことが書いてある。これはなかなかいい本です。内村先生は決して頭で書かない。体験からものを言ってます。いろいろな苦難を通った人ですから。

### ● 神の業の顕れん為

では、ヨハネ伝9章に入ります。

1 イエス途往くとき、生まれながらの盲人を見給いたれば、<sup>2</sup> 弟子たち問いて言う『ラビ、この人の盲人にて生まれしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』<sup>3</sup> イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。』

これはさすがにキリストの答えですね。たとえ罪であろうと親の何であろうと、相対的なそういうことを問題にしてはダメだという。

「ただ彼の上に神の業の顕れん為なり」

と。我々の生活は神中心です、具体的にはキリスト中心です。我々はいろいろな問題に遇っても、神中心、キリスト中心にものを判断していかなくてはいいかん。そうしたら、行き詰まることはない。一切のものを担ってくださるのはキリストですから。

「我が荷は軽し」

というのはそういうことなんです。

「私が背負っているから、お前は軽いよ。私が与えるお前の荷物は軽い。私が重いのを背負っているよ」

と。実は、我々自身がキリストにしょわれているわけだ。そういう、

「悩み苦しみを担う」



という言葉はイザヤ書にある。

「ヤコブの家よ、イスラエルのいへの遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。なんじらの年老るまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負わん。我つくりたれば拾ぐべし。我また負いかつ救わん。」（イザヤ46・3～4）

とある。また、42章8節に、

「われはエホバなり、是わが名なり。我はわが栄光をほかの者にあたえず、わがほまれを偶像にあたえざるなり。」（イザヤ42・8）

と書いてある。「栄光は何処に」とは、42章のこの言葉が非常に大事な言葉です。神の栄光は偶像には与えないという。その頃はたくさん偶像がありましたから。他の民の諸々の神さまを拝んだりしているのは、冗談じゃないぞと。

### ●キリストの栄光の体現者となる

「聾者よきけ、聾者よ眼をそそぎてみよ。聾者はたれぞ、わが僕にあらずや。」

誰かわがつかかわせる使者の如き聾者あらんや。誰かわが友の如きめしいあらんや。誰かエホバの僕のごときめしいあらんや。汝おおくのことを見れども

顧みず、耳をひらけども聞かざるなり。」（イザヤ42・18～20）

「イスラエルは選ばれた者かと思つたら、冗談じゃない、ダメだ。選びの民が却つてダメになっている」

と、第二イザヤが非常に激しく言っているところです。43章1節から7節までが大事なところですよ。

「すべてわが名をもて称えらるる者をきたらせよ、我かれらをわが栄光のために創造せり。われ曩にこれを造りかつ成しおわれり。」（イザヤ43・7）

神さまの栄光が現れることが我々の喜びである。父なる神の名が、神の力が、神の栄光が現れること。キリストはそれを喜んだ。栄光の内容は力であり、生命であり、愛であるわけですよ。単なる光ではない。

「イエス答えたもう『我もし己に栄光を帰せば、我が栄光は空し。我に栄光を帰する者は我が父なり、即ち汝らが己の神と称うる者なり。』」（ヨハネ8・54）

神さまが栄光を帰してください。神さまの栄光が現れる。神さまの栄光がどこに現れるかというところ、キリストに現れる。キリストの栄光がどこに現れるかというところ、我々に現れる。我々においてキリストの栄光が現れる。キリストの栄光の体現者——存在で体現する——は我々自身なんです。キリストの栄光を体現するから、キリストの御名が讃美されるわけですよ。

普通の世の中の事でも、そういうことがある。そのお弟子さんや何かが一生涯懸命でやって現れているのは、そのご主人の、長の名が現れる、名が称えられる。そういうことが普



通の世界でもある。本当はみなお弟子さんたちがやって、長は何もしていないということがある。下にいる人たちが上の人の栄光を、名を現している。総理大臣なんて大した事をしなくせに、下の人が一生懸命でやって、名を現しているわけです。そのようなことです。キリストの栄光を現したのは、パウロとかヨハネとかペテロとか、ああいう弟子たちです。キリストはもう十字架に架かって行ってしまったから。ペンテコステから一生懸命にキリストの栄光を現した。この集会も私がやっているのではない。あなた方がキリストの栄光を現してくださっているわけです。

旧約のダニエル書12章に、

「<sup>1</sup>その時汝の民の人々のために立つところの大なる君ミカエル起ちあがらん。是艱難の時なり。国ありてより以来その時にいたるまで斯る艱難ありし事なかるべし。その時汝の民は救われん。即ち書にしるされたる者はみな救われん。<sup>2</sup>また地の下に睡りおる者の中衆多の者目を醒ますん。その中永生を得る者あり。また恥辱を蒙りて限りなく羞る者あるべし。

信仰がないと、こういうことになってしまふ。

<sup>3</sup>穎悟者は空の光輝のごとくに耀かん。

「穎悟」とは、頭がいいということではない。本当に福音を受けとっている者がこの「穎悟者」です。旧約の「知る」「悟る」というのは全存在で受けとることをいう。

また衆多の人を義に導ける者は星のごとくなりて永遠にいたらん。<sup>4</sup>ダニエルよ終末の時まで此言を秘し此書を封じおけ。衆多の者跋涉らん。而して知識増すべしと。」(ダニエル12・1～4)

「知識」とは本当の智慧のことです。不思議なことが書いてある。旧約聖書も新約のキリストの光で読めば、なかなか味がある。

### ● 現行者

<sup>3</sup>イエス答え給う『この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり。』

盲人でも聾人でも、自分の罪でも親の罪でもない。

「ただ彼の上に神の業の顕れん為なり」

とキリストが言われた。これは大事な言葉です。そして、我々はキリストの栄光の体現者となるのが大事です。体現しないものはクリスチャンではないんだ、ただいわゆる「信ずる」なんていうのでは。

私は「信仰」という言葉は嫌いだ。信じ仰いだって何にもならない。「現行」、現に行く、現にあらず。現にあらずなないとダメです。「現行者」、これが証者です。

日本人はもつと福音を受けとらなければダメです。福音を受けとっているのは日本の全



人口の何百分の一かね、あるいは何千分の一、何万分の一かもしれない。それくらい無宗教だ。人が亡くなると、坊さんに頼んでお葬式なんかして、その時だけ坊さんに頼んでいる。自分自身が活ける坊主になっていなければダメなんだ、宗教が身につけていなければ。宗教が土台になっていれば、何をしていても力がくる。そして、楽しく展開していく。そういう意味で宗教が土台になっているという人が非常に少ないようだ。本当の底力というのは福音からくる。口が讚美歌を歌っているのではない。身体そのものが、存在そのものが讚美歌を歌っているわけです。

4 我を遣し給いし者の業を我ら昼の間になさざる可からず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能わず。5 われ世における間は世の光なり』  
夜になったら、誰も働けない。昼間のうちにしっかりととけと。

「私がいるうちに」

ということが「昼間のうちに」ということです。キリストは光だから。「世の光」という。

その人の回りには何か光がさしている。その光は暖かい光です。人を活かす光、助ける光です。冷たい月の光ではない。暖かい太陽の光です。

6 かく言いて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言い給う、  
7 『ゆきてシロアム(称けば遣されたる者)の池にて洗え』乃ちゆきて洗いたれば、見ゆることを得て帰れり。

これは大変なことだ。普通の人にはこんなことをしたってダメです。キリストのやる所には、わざの中に力が入っている、光が入っている。現象面では同じことであっても、質が違う。問題は量ではなくて、質なんです。お呪ないでも何でもありません。

私は自分で雅歌書の讚美歌(A12)をつくったときに、恋人の女の人の息は天の靈が入っている息だというようなことをあの歌に書いた。

「汝れの鳩胸　み霊にみちて

汝れの息吹きは　天つ風

汝れが唇　滴る蜜よ」

と。おもしろいよ。

〔註 A12「われはシヤロンに」—雅歌のこころ—(1979.12.20 作詞)(中山晋平作曲)「カチューシャ可愛いや」の曲で〕

- 1 「われはシヤロンに　花咲く野バラ　わが牧人　馳せ来たれ！　我を抱きて　接吻たもれ」(一)
- 2 「汝れの鳩胸　み霊にみちて　汝れの息吹きは　天つ風　汝れが唇　滴る蜜よ」(二)
- 3 「神に我が魂　一如となれり　われらもまこと　一つなり　いざや野山の　牧場に往かん」(三)
- 4　われをみ胸に　印となせよ　愛の契りは　とこしえに　死をも突きぬけ　焔と燃ゆる！」(四)

「天気」という言葉があるけれども、この天気というのは素晴らしい言葉だ。天の気なんだ。「お天気がいい」という。この天は具体的には太陽だ。太陽の気、これは光が入っている、



熱が入っている。これは熱の光です。月の光ではダメだ、太陽の光でなければ。月がどんなに照つても、光に暖かさが無い。きれいはきれいだよ。けれども、暖かさが無い。

風と太陽が旅人の外套を脱がせる競争をした話がある。風は吹いて、着ている人の外套をはがそうと思つたが、逆に旅人は一生懸命で外套をしつかり閉じてしまった。脱がせられない。ところが、太陽が照つたら、暖かいものだから、外套を脱いでしまった。それで太陽が勝つたという譬え話がある。それは愛の光だから。冷たい感じのする人は不幸だ、暖かい感じがしないとね。それはその人がやはり愛をもつてないと冷たい。

### ● 神さまから遣わされた者

生まれつきの盲人の目が見えてしまった。驚いたね。

8ここに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言う『この人は坐して物乞いいたるにあらずや』<sup>9</sup>或人は『夫なり』<sup>9</sup>といい、或人は『否、ただ似たるなり』<sup>9</sup>という。かの者『われは夫なり』<sup>9</sup>と言いたれば、<sup>10</sup>人々いう『さらば汝の目は如何にして開きたるか』<sup>11</sup>答う『イエスという人、泥をつくり我が目に塗りて言う「シロアムに往きて洗え」と、乃ち往きて洗いたれば、物見<sup>12</sup>ることを得たり』<sup>12</sup>彼ら『その人は何処に居るか』<sup>13</sup>と云えば『知らず』<sup>13</sup>と答う。

<sup>13</sup>人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。<sup>14</sup>イエスの泥をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なりき。

それでまた問題にするんだ。キリスト教でいうと土曜日になる。

<sup>15</sup>パリサイ人<sup>びと</sup>らも亦いかにして物見<sup>15</sup>ることを得しかと問いたれば、彼いう『かの人わが目に泥をぬり、我これを洗いて見ゆることを得たり』<sup>16</sup>パリサイ人の中なる或人は『かの人、安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』<sup>16</sup>  
<sup>17</sup>と云い、

パリサイ人なんていうのはそんなもので、儀文的な考えなんです。

或人は『罪ある人いかで斯る徴をなし得んや』<sup>17</sup>と云いて互に相争いたり。

こんな徴は罪びとにはできない。だから、あの人は罪びとではないんだと。

<sup>17</sup>爰にまた盲目なりし人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいうか』<sup>18</sup>彼いう『預言者なり』<sup>18</sup>

「預言者」というのは「神さまから遣わされた者」ということです。神の言を、神言を預かつた者が預言者です。旧約のいろいろな預言者、アモス、ホセア、イザヤ、ミカ、エレミヤ、あのような偉大な預言者たちはみな神の言を預かつた者です。旧約の預言書というのは非常に大事です。詩篇は、こつち側から神さまに祈つたり讚美したりしている本だ。ところが、預言書は、上から来ている神さまの言葉を伝えている。大事なのは預言書なんです。アモス、ホセア、イザヤ、ミカ、エレミヤ、旧約のこの預言書はよく読まないね。これは福音の



前段階です。あるいは、福音がその中に既に入っています。イザヤ書なんていうのは福音が完全に入っている。イザヤという預言者は大変なものだ。あれは第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤという三人の人が書いた。イザヤ書66章は、聖書66巻と同じ数だ。旧約の最大の書は何といってもイザヤ書です。詩篇ではない。

「旧約の代表は詩篇だ」

とマルチン・ルターは言ったけれども、私に言わせればそうではない。旧約の代表はイザヤ書です。ルターは歌を歌うことが好きだったからね。「詩篇」という訳は本当はいけない。旧約の「テヒリーム」というのは「讚美の書」ということです。

### ●他覚者

18 ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるようになりしことを未だ信ぜずして、目の開きたる人の両親を呼び、<sup>19</sup> 問いて言う『これは盲目にて生まれしと言う汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』<sup>20</sup> 両親こたえて言う『かれの我が子なることと盲目にて生まれたる事とを知る。<sup>21</sup> されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問えて年長けたれば自ら己がことを語らん』<sup>22</sup> 両親のかく言いしは、ユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議りて『若しイエスをキリストと言ひ顕す者あらば、除名すべし』と定めたるに因る。<sup>23</sup> 両親の『かれ年長けたれば彼に問え』と云えるは、此の故なり。

「キリスト」とは「油注がれたる者」ということ、即ち「救主」です。パリサイ人はイエスをキリストと認めない。「パリサイ人」とは「選び分かれたる者」という意味で、自分たちは普通の凡人と違って選び分かれたる信仰厚き者、モーセの律法をちゃんと守っている者だとしている。それがパリサイ人の内容で、パリサイ精神というのは自己義認者なんです。自己を義としている。これはダメなんです。キリストは自分を義としない。

「自分は何者でもない。何もできない」と、キリストはヨハネ伝でちゃんと言っている。

「イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者』」

ヨハネ伝7章、8章はおもしろい。本当に劇みたいだね。私には「無者」とよく言います、

「キリストは無者である」

と。世界中で「キリストは無者だ」なんていう言い方はおそらくないでしょうね。自分を



何ものともしない。我が無い。無我者、我無きひと。キリストには神さまだけが、父だけがいる。キリストの自覚は他覚なんだ。父という——自覚ではない——他覚なんだ。神さまという他者を覚えている、「他覚者」なんだ。キリストに聞いたら、

「私には神さまの他にはありません。自分なんかありません」

と言う。無我なんだ。だから、神の力がみな上からやってくる。今度は神の体現者になるわけだ。我々は、クリスチャンというのは、キリストの体現者です。「主さま！」といえば、直ちにその力が来て、それを体現している。

キリストというのは無色透明ですよ、色がついてない。だから、「主さま」という自覚においては、無色の色のつかない光で見えているわけですから、ものが本当に見える。本が本当に読める。普通の人は、

「キリストを自覚したら、キリスト教になってしまつて、本が本当に読めないではないか」

なんて思う。そうではない。キリストは無色透明だから本当に読める。キリストの光で読むと、その本の文字の奥がもうひとつ読めるようになる。著者よりもすごい読者になれる。著者の言葉の奥を読んでも、パウロの書翰でもヨハネの書翰でも何でも、その光で読まないと、実は読めない。ローマ書なんていうのは、そういう意味でも素晴らしい。それはキリストの光で書いているから。キリストの光で読まなかつたら読めない。聖書研究会なんてダメだ、研究したつて。身読会、からだで読む。それならいい。

私は年とつたとは思わない。あなた方は笑うかもしれないが、私は永遠の青年なんだ。年がいくつになろうとも、魂たましひ之たましひ霊たましひが羽をもつて進んでいるひとを青年という。女の人もいくつになつても、みな少女なんだ。魂之霊が若々しい。「たましひ」は「魂之霊」と書く。霊は「ひ」と読む。

自分で言うてはおかしいけれども、著作集全十巻はよく読んでくださいよ。そのうちに私はここでしゃべることができなくなるから。

### ● 栄光は何処に

神の栄光はキリストに現れ、キリストの栄光は我々に現れる。それがこの「栄光は何処に」です。要するに、我々が栄光を現しているのは、その人の栄光ではない。

「自分の栄光を求める者はダメだ。私も自分の栄光を求めていない。神さまの栄光

だけだ」

と、キリストがはつきり言っている。集会だつて、本当は露天で集会するのが一番いい。神の光のもとで、太陽の光のもとで集会するのが一番いい。電灯では本当はダメなんだ。野外集会が一番いい。お天道さんの光の下で。戦争中は、私は野外でドイツ語を教えたことがある。非常に気持がよかつたね。



24 かれら盲目なりし人を再び呼びて言う『神に栄光を帰せよ、我等はかの人の罪人たるを知る』<sup>25</sup> 答う『かれ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』<sup>26</sup> 彼ら言う『かれは汝に何をなししか、如何にして目をあけしか』<sup>27</sup> 答う『われ既に汝らに告げたと聴かざりき。何ぞまた聴かんとするか、汝らもその弟子とならんことを望むか』<sup>28</sup> かれら罵りて言う『なんじは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり。』<sup>29</sup> モーセに神の語り給いしことを知れど、此の人の何処よりかを知らず』

旧約のモーセ一点張りなんだな。

<sup>30</sup> 答えて言う『その何処よりかを知らずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。』<sup>31</sup> 神は罪人に聴き給わねど、敬虔にして御意をおこなう人に聴き給うことを我らは知る。』<sup>32</sup> 世の太初より、盲目にて生まれし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。』<sup>33</sup> かの人もし神より出でずば、何事をも為し得ざらん』<sup>34</sup> かれら答えて『なんじ全く罪のうちに生まれながら、我らを教うるか』と  
言いて、遂に彼を追い出せり。

そういうパリサイ人だからね。

「罪びとにはそんなことはできない。私の目をあけた人は特別なひとだ」

と答えているわけです。

我々は罪びとです。けれども、その罪びとにキリストが宿ってください。だから、キリストの力が我々を通して現れる。パウロも罪びとです。

「我は罪びとの首なり」

とパウロは言っている。その罪びとの首のパウロを使って、キリストはどんなにたくさんこのことをなさったか。それはパウロという罪びとの中に完全にキリストの霊が宿ったから。その霊が宿る前に、パウロはキリストに贖罪を受けている。罪を消されている。それで、罪びとの首なるパウロがあれだけの大きな業をやっている。それは罪びとの中にキリストが宿りたもうからです。我々の中にキリストは来りて宿りたもう。

「われ汝を棄てず」

という。

「人は棄つれど君は棄てず」

という讚美歌があるね、あの通りです。人に棄てられても、キリストには棄てられない。それが本当のクリスチャンです。人に認められて、いい気になっているクリスチャンはダメなんだ。キリストはそっぽを向かいてしまうぞ。破れ器の中に金剛石が光る。我々、破れ器の中にキリストという金剛石が光る。それだけの力強い自覚のないクリスチャンなんでものはクリスチャンでも何でもない。

